

幻談

幸田露伴



こう暑くなつては皆さん方がたがあるいは高い山に行かれたり、あるいは涼しい海辺うみべに行かれたりしまして、そうしてこの悩ましい日を充実した生活の一部分として送ろうとなさるのもごもつと御尤もです。が、もう古い朽ちてしまえば山へも行かれず、海へも出られないでいますが、その代り小庭こにわの朝露あさつゆ、縁側えんがわの夕風ぐらゐに満足して、無難に平和な日を過して行けるといふもので、まあ年寄としよりはそこいらで落着いて行かなければならないのが自然なのです。山へ登るのも極ごくくいいことであります。深山しんざんに入り、高山、嶮山けんざんなんぞへ登るといふことになる、一種の神秘的な興味も多いことです。その代りまた危険も生じます訳わけで、怖おそろしい話が伝えられております。海もまた同じことです。今お話し致そうというのは海の話ですが、先

に山の話を一度申して置きます。

それは西暦千八百六十五年の七月の十三日の午前五時半にツエルマツトという処ところから出発して、名高いアルプスのマッターホルンを世界始まつて以来最初に征服致しましょうと心ざし、その翌十四日の夜明前よあけまえから骨を折つて、そうして午後一時四十分に頂上へ着きましたのが、あの名高いアルプス登攀記とうはんきの著者のウインパー一行でありました。その一行八人がアルプスのマッターホルンを初めて征服したので、それから段々とアルプスも開ひらけたような訳です。

それは皆様がマッターホルンの征服の紀行によつて御承知の通りでありますから、今私わたくしが申さなくても夙つとに御合点ごがてんのことでありますが、さてその時に、その前から他の一行すなわ即ち伊太利の

カレルという人の一群がやはりそこを征服しようとして、両者は自然と競争の形になっていたのであります。しかしカレルの方は不幸にして道の取り方が違っていたために、ウインパーの一行には負けてしまったのであります。ウインパーの一行は登る時には、クロス、それから次に年を取った方のペーテル、それからその悴せがれが二人、それからフランシス・ダグラス卿ぎょうというこれは身分のある人です。それからハドウ、それからハドス、それからウインパーというのが一番終しまいで、つまり八人がその順序で登りました。

十四日の一時四十分にとうとうさしもの恐おそしいマッターホルンの頂上、天にもとどくような頂上へ登り得おおいて大に喜んで、それから下山にかかりました。下山にかかる時には、一番先へクロス、その次がハドウ、その次がハドス、それからフラン

シス・ダグラス卿、それから年を取ったところのペーテル、一番終いがウインパー、それで段々降りて来たのでありますが、それだけの前古未曾有ぜんこみぞうの大成功を収め得た八人は、上のぼりにくくらべてはなお一倍おそろしい氷雪の危険の路を用心深く辿たどりましたのです。ところが、第二番目のハドウ、それは少し山の経験が足りなかつたせいもありましようし、また疲労したせいもありましたろうし、イヤ、むしろ運命のせいと申したことで、誤つて滑つて、一番先にいたクロスへぶつかりました。そうすると、雪や氷の蔽おほつてゐる足がかりもないような険峻けんしゅんの処で、そういうことが起つたので、忽ちクロスは身をさらわれ、二人は一つになつて落ちて行きました訳わけ。あらかじめロープをもつて銘々めいめいの身をつないで、一人が落ちても他が踏止まりふみとど、そして個々の危険を救うようにしてあつたの

でありますけれども、何せ絶壁の処で落ちかかったのですから堪りません、二人に負けて第三番目も落ちて行く。それからフランシス・ダグラス卿は四番目にいたのですが、三人の下へ落ちて行く勢で、この人も下へ連れて行かれました。ダグラス卿とあとの四人との間でロープはピンと張られました。四人はウンと踏堪えました。落ちる四人と堪える四人との間で、ロープは力足らずしてプツリと切れて終わりました。丁度午後三時のことでありましたが、前の四人は四千尺ばかりの氷雪の処を逆おとしに落下したのです。後の人は其処へ残つたけれども、見る見る自分たちの一行の半分は逆落しになつて深い深い谷底へ落ちて行くのを目にしたその心持はどんなでしたろう。それで上に残つた者は狂人の如く興奮し、死人の如く絶望し、手足も動かせぬようになったけれども、さて

あるべきではありませぬから、自分たちも今度は滑つて死ぬばかりか、不測の運命に臨んでいる身と思ひながら段々下りてまいりまして、そうして漸く午後ようやの六時頃に幾何いくちか危険の少いところまで下りて来ました。

下りては来ましたが、つい先刻さつきまで一緒にいた人々がもう訳も分らぬ山の魔の手にさらわれて終しまつたと思うと、不思議な心理状態になつていたに相違ありません。で、我々はそういう場合へ行つたことがなくて、ただ話のみを聞いただけでは、それらの人の心の中うちがどんなものであつたらうかということほんは、先ず殆ど想像出来ぬのであります。そのウインパーの記したものによりますと、その時夕方六時頃です、ペーテル一族の者は山登りに馴れている人ですが、その一人がふと見るといふと、リスカンという方に、ぼうつとしたアーチ

のようなものが見えましたので、はてナと目を留めておりま
すると、外の者もその見ている方を見ました。するとやがて
そのアーチの処へ西洋諸国の人にとっては東洋の我々が思う
のとは違つた感情を持つところの十字架の形が、それも小さ
いのではない、大きな十字架の形が二つ、ありあり空中に見
えました。それで皆もなにかこの世の感じでない感じを以て
それを見ました、と記してあります。それが一人見たので
はありません、残つていた人にみな見えたと申すのです。十
字架は我々の五輪ごりんの塔とう同様なものです。それは時に山の氣象
で以て何かの形が見えることもあるものでありますが、とに
かく今のさきまで生きておつた一行の者が亡くなつて、そう
してその後あとへ持つて来て四人が皆そういう十字架を見た、そ
れも一人二人に見えたのでなく、四人に見えたのでした。山

ひとりふたり

にはよく自分の身体からだの影が光線の投げられる状態によつて、向う側へ現あらわれることがあります。四人の中うちにはそういう幻影かと思つた者もあつたでしょう、そこで自分たちが手を動かしたり身体からだを動かして見たところが、それには何らの關係がなかつたと申します。

これでこの話はお終しまいに致します。古い経文きやうもんの言葉に、心こころは巧たくみなる画師えしの如し、とございます。何となく思おも浮うめらるる言葉ではござりませぬか。

さてお話し致しますのは、自分が魚釣うおつりを楽たのんでおりました頃ある、或先輩あるから承うけたまわりました御話おはなしです。徳川期もまだひどく末すえにならない時分の事でございます。江戸は本所ほんじよの方に住んでおられました人で——本所という処は余り位置の高くない武

士どもが多くいた処で、よく本所の小ッ旗ばたもと本などと江戸の諺ことわざで申した位で、千石ごくらとまではならないような何百石というよ
うな小さな身分の人たちが住んでおりました。これもやはり
そういう身分の人で、物事がよく出来るので以てもつ、一時は役づ
いておりました。役づいておられますれば、つまり出世の道も
開けて、宜よろしい訳でしたが、どうも世の中というものはむず
かしいもので、その人が良いから出世するという風には決きまつ
ていないもので、かえつて外ほかの者の嫉そねみや憎みをも受けまし
て、そうして役を取上げられます、そうすると大概小普請こぶしん
というのに入る。出る杓くひが打たれて済んで御小普請おこぶしん、などと
申しまして、小普請入りというのは、つまり非役ひやくになつたと
いうほどの意味になります。この人も良い人であつたけれど
も小普請入いりになつて、小普請になつてみれば閑ひまなものですか

ら、御用は殆どないので、釣つりを楽みにしておりました。別に活計くわしに困る訳じゃなし、奢おごりも致さず、偏屈へんくつでもなく、ものはよく分る、男おとこも好よし、誰が目にも良い人。そういう人でしたから、他の人に面倒な関係なんかを及ぼさない釣つりを楽んでいたのは極く結構な御話でした。

そこでこの人、暇具ひまぐあい合さえ良ければ釣つりに出ておりました。神田川かんだがわの方に船宿ふなやどがあつて、日取ひどりり即ち約束の日には船頭ふなづかが本所側の方に舟を持つて来ているから、其処そこからその舟に乗つて、そうして釣つりに出て行く。帰る時も舟から直じきに本所側あがに上つて、自分の屋敷へ行く、まことに都合好くなつておりました。そして潮の好い時には毎日のようにケイズを釣つておりました。ケイズと申しますと、私が江戸なま訛なまりを言うものとお思ひになる方もありますように、今は皆様カイズカイズとおつしや

いますが、カイズは訛りで、ケイズが本当です。系図を言えば鯛たいの中うち、というので、系図けいず鯛たいを略してケイズという黒い鯛で、あの恵比寿えびす様が抱いていらつしやるものです。イヤ、斯か様に申しますと、えびす様の抱いていらつしやるのは赤い鯛ではないか、変なことばかり言う人だと、また叱られますか知れませんが、これは野必大やひつだいと申す博物の先生が申されたことです。第一えびす様が持つていられるようなああいう竿さおでは赤い鯛は釣りませぬものです。黒鯛くろたいならああいう竿で丁度釣れますのです。釣竿たうざんの談だんになりますので、よけいなことですがちよつと申し添えます。

或日あるのこと、この人が例の如く舟に乗つて出ました。船頭の吉きちといふのはもう五十過ぎて、船頭の年寄なぞといふものは客が喜ばないもんでありますが、この人は何もそう焦あせつて魚

をむやみに獲とろうというのではなし、吉というのは年は取っているけれども、まだそれでもそんなにぼけているほど年を取っているのじゃなし、ものはいろいろよく知っているし、この人は吉を好い船頭として始終使っていたのです。釣船頭というものは魚釣の指南番しなんばんか案内人のように思う方もあるかも知れませぬけれども、元来そういうものじゃないので、ただ魚釣をして遊ぶ人の相手になるまでで、つまり客を扱うものなんですから、長く船頭をしていた者なんぞというものはよく人を吞のみ込み、そうして人が愉快と思うこと、不愉快と思うことを吞込んで、愉快と思うように時間を送らせることが出来れば、それが好い船頭です。網船頭あみせんどうなぞというものはなおのことそうです。網は御客自身打つ人もあるけれども先ずは網打あみうちが打って魚を獲るのです。といつて魚を獲って活計くらしを立

てる漁師とは異^{ちが}う。客に魚を与えることを多くするより、客あみりように網漁に出たという興味を与えるのが主しゅです。ですから網打だの釣船頭だのというものは、洒落しやれが分らないような者じやそれになつていない。遊客も芸者の顔を見れば三弦しやみを弾ひき歌を唄うたわせ、お酌しやくには扇子せんすを取つて立つて舞わせる、むやみに多く歌舞かぶを提供させるのが好いと思つてゐるような人は、まだまるで遊びを知らないのと同じく、魚にばかりこだわつてゐるのは、いわゆる二才客にさいきゃくです。といつて釣に出て釣らなくても可よいという理屈はありますが、アコギに船頭を使つて無理にでも魚を獲ろうというようなところは通り越してゐる人ですから、老船頭の吉でも、かえつてそれを好いとしてゐるのでした。

ケイズ釣というのは釣の中でもまた他の釣と様子が違ふ。

なぜかと言いますと、他の、例えばキス釣なんぞというのは立込みたちこといって水の中へ入っていたり、あるいは脚榻釣きやたつりといって高い脚榻を海の中へ立て、その上に上あがつて釣るので、魚のお通りを待っているのですから、これを悪く言う者は乞食釣こじぎぶりなんぞと言う位で、魚が通つてくれなければ仕様がな、みじめな態ざまだからです。それからまたボラ釣なんぞというものは、ボラという魚が余り上等の魚でない、群れ魚ですから獲れる時は重たくて仕方がない、担になわなくては持てないほど獲れたりなんぞする上に、これを釣る時には舟の艫とこもの方へ出まして、そうして大きな長い板子いたごや楫かじなんぞを舟の小縁こべりから小縁へ渡して、それに腰を掛けて、風の吹きさらしにヤタ一いちの客よりわるいかつこうをして釣るのでありますから、もう遊びではありません。本職の漁師みたいな姿になつてしまつ

て、まことに哀あわれなものであります。が、それはまたそれで丁度ちようしあいそういう調子合のことの好きな磊落らいらくな人が、ボラ釣は豪爽ごうそうで好いなどと賞美する釣であります。が、話中の人はそんな釣はしませぬ。ケイズ釣りというのはそういうのと違いました、その時分、江戸の前の魚はずつと大川おおかわへ奥深く入りましたものであります、永代橋えいたいばし新大橋しんおおはしより上流かみの方でも釣つたものです。それですから善女ぜんによが功德くどくのために地藏尊じぞうそんの御影ごえいを刷しつた小紙片しょうしへんを両国橋りやうごくばしの上からハラハラと流す、それがケイズの眼球めだまへかぶさるなどという今からは想像も出来ないような穿うがちさえありました位です。

で、川のケイズ釣は川の深い処で釣る場合は手釣てづりを引いたもので、竿などを振廻ふりまわして使わずとも済むような訳でした。

長い釣^{つり}綸^{いと}を※輪^{わっか}から出して、そうして二本指^{あた}で中^{ちゆう}りを考えて釣^{つり}る。疲^{つか}れた時^{とき}には舟^{ふね}の小^{せう}縁^{えん}へ持^もつて行^いつて錐^{きり}を立てて、その錐^{きり}の上^{うへ}に鯨^{くじら}の鬚^{ひげ}を据^すえて、その鬚^{ひげ}に持^もたせた岐^{また}に綸^{いと}をくいませて休^{やす}む。これを「いとかけ」と申^{まを}しました。後^{のち}には進^{すす}歩^みして、その鯨^{くじら}の鬚^{ひげ}の上^{うへ}へ鈴^{すず}なんぞを附^つけるようになり、脈^{みやく}鈴^{すず}と申^{まを}すようになりました。脈^{みやく}鈴^{すず}は今^{いま}も用^{もち}いられています。しかし今^{いま}では川^{かわ}の様^{よう}子^こが全^{ちゆう}く異^いいまして、大^{だい}川^{かわ}の釣^{つり}は全^{ちゆう}部^ぶなくなり、ケイズの脈^{みやく}釣^{つり}なんぞというものは何^ど方^{なた}も御^ご承^{じやう}知^ちないようになりました。ただしその時^{とき}分^{ぶん}でも脈^{みやく}釣^{つり}じやそう釣^{つり}れない。そうして毎^{まい}日出^でて本^{ほん}所^{じよ}から直^{ちゆう}ぐ鼻^{はな}の先^{さき}の大^{だい}川^{かわ}の永^{えい}代^{たい}の上^{うへ}あたりで以^{もつ}て釣^{つり}つていては興^{きよう}も尽^つきるわけですから、話^わ中^{ちゆう}の人は、

川の脈釣でなく海の竿釣をたのしみました。竿釣にも色々ありまして、明治の末頃はハタキなんぞという釣もありました。これは舟の上に立っていて、御台場に打付ける浪の荒れ狂うような処へ鉤を抛つて入れて釣るのです。強い南風に吹かれながら、乱石にあたる浪の白泡立つ中へ竿を振つて餌を打込むのですから、釣れることは釣れても随分労働的の釣であります。そんな釣はその時分にはなかつた、御台場もなかつたのである。それからまた今は導流柵なんぞで流して釣る流し釣もあります。これもなかなか草臥れる釣であります。釣はどうも魚を獲ろうとする三昧になりますと、上品でもなく、遊びも苦しくなるようでございます。

そんな釣は古い時分にはなくて、漣の中だとか漣がらみで釣るのを漣釣と申しました。これは海の中に自から水の流れ

る筋すじがありますから、その筋をたよつて舟を潮しほなりにちやんと止めとまして、お客は將監しょうげん——つまり舟の頭かしらの方からの第一の室ま——に向うを向いてしゃんと坐つて、そうして釣竿を右と左はちと八の字のように振ふりこ込んで、舟首みよし近く、甲板かっぱのさきの方に互わたつている簪かんこの右の方へ右の竿、左の方へ左の竿をもたせ、その竿尻さおじりをちよつと何とかした銘めい々の随意の趣向でちよいと軽く止めて置くのであります。そうして客は端然として竿先を見ているのです。船頭は客よりも後ろの次の間まにいまして、丁度お供のような形に、先ずは少し右舷うげんによつて扣ひかえております。日がさす、雨がふる、いづれにも無論のこと苦くるしみというものを葺ふきます。それはおもての舟梁ふなはりとその次の舟梁とにあいている孔あなに、「たてじ」を立て、二のたてじに棟むねを渡し、肘木ひじきを左右にはね出させて、肘木と肘木とを木竿で連つらねて苦を受

けさせます。苫一枚というのは凡そ畳一枚より少し大きいもの、贅沢ぜいたくにしますと尺長しゃくながの苫は畳一枚のよりよほど長いのです。それを四枚、舟の表おもての間の屋根まのように葺くのでありますから、まことに具合好く、長四畳ながよじようの室へやの天井のように引いてしまえば、苫は十分に日も雨も防ぎますから、ちゃんと座敷すなわのようになるので、それでその苫の下即ち表の間——釣舟つりぶねは多く網舟あみぶねと違って表の間が深いのでありますから、まことに調子が宜よろしい。そこへ莫蔭ござなんぞ敷きまして、その上に敷物しきものを置き、胡坐あぐらなんぞ搔かかないで正しく坐っているのが式しきです。故人成田屋なりたやが今の幸四郎こうしろう、当時の染五郎そめごろうを連れて釣に出た時、芸道舞台上では指図を仰いでも、勝手にしなせいと突放つっぱなして教えてくれなかつたくせに、舟では染五郎の座りようを咎とがめて、そんな馬鹿な坐りようがあるかと激しく叱つたというこ

とを、幸四郎さんから直接に聞きました。メナダ釣、ケイズ釣、すずき釣、下品でない釣はすべてそんなものです。

それで魚が来ましても、また、鯛の類というものは、まことにそういう釣をする人々に具合の好く出来ているもので、鯛の二段引きと申しまして、偶たまには一度にガブツと食べて釣竿を持って行くというようなこともありますけれども、それはむしろ稀有けうの例で、ケイズは大抵は一度釣竿の先へあたりを見せて、それからちよつとして本当に食うものでありますから、竿先の動いた時に、来たナと心づきましたら、ゆつくりと手を竿尻にかけて、次のあたりを待っている。次に魚がぎゅつと締める時に、右の竿なら右の手であわせて竿を起し、自分の直すくと後ろの方へそのまま持つて行くので、そうす

ると後ろに船頭がいますから、これが※網たまをしやんと持つて
いまして掬すくい取ります。大きくない魚を釣つても、そこが遊
びですから竿をぐつと上げて廻して、後ろの船頭の方に遣やる。
船頭は魚を掬つて、鉤はりを外はずして、舟の丁度真中まんなかの処いけまに活間いけまが
ありますから魚を其処そこへ入れる。それから船頭がまた餌えさをつ
ける。「旦那、つきました」と言うのと、竿をまた元へ戻して
狙つたところへ振込むという訳であります。ですから、客は
上布じょうふの着物を着ていても釣ることが出来ます。まことに
綺麗きれい事に殿様らしく遣やつていられる釣です。そこで茶の好き
な人は玉露ぎよくろなど入れて、茶盆ちやぼんを傍そばに置いて茶を飲んでいても、
相手が二段引きの鯛ですから、慣れてくればしずかに茶碗を

下に置いて、そうして釣つていられる。酒の好きな人は潮間しおまなどは酒を飲みながらも釣る。多く夏の釣でありますから、泡盛あわもりだとか、柳蔭やなぎかげなどというものが喜ばれたもので、置水屋おきみずやほど大きいものではありませんが上下箱じょうげばこというのに茶器酒器、食器そなも具えられ、ちよつとした下物さかな、そんなものも仕込まれてあるような訳です。万事がそういう調子なのですから、真に遊びになります。しかも舟は上じょうだな檜ひのきで洗い立ててありますれば、清潔この上なしです。しかも涼しい風のすいすい流れる海上に、片苜かたとまを切つた舟なんぞ、遠くから見ると余所目よそめから見ても如何いかにも涼しいものです。青い空の中へ浮上うきあがつたように広々ひろびろと潮が張っているその上に、風のつき抜ける日蔭のある一葉いちようの舟が、天から落ちた大鳥おおとりの一枚の羽のようにふわりとしているのですから。

それからまた、みよづり 溼釣でない釣もあるのです。それは溼でもつ以てうまく食わなかつたりなんかした時に、魚というものは必ず何かの蔭にいるものですから、それを釣るのです。鳥は木により、さかなはかかり、人は情なさけの蔭による、なんぞという「よしこの」があります。かかりというのは水の中にもささしたものがあつて、そこ 其処に網を打つことも困難であり、釣鉤つりばりを入れることも困難なようなひつかかりがあるから、かかりと申します。そのかかりにはとかくに魚が寄るものであります。そのかかりの前へ出掛けて行つて、そうしてかかりと擦すれ擦れに鉤を打込む、それがかかり前の釣といひます。溼だひらばの平場だので釣れない時にかかり前に行くといふことは誰もすること。またわざわざかかりへ行きたがる人もある位。古い溼みよぐい杖、ボツカ、われ舟、ヒビがらみ、シカケを失うのを覚

悟の前にして、大様にそれぞれおおようの趣向で遊びます。いずれにしても大名釣だいまようづりといわれるだけに、ケイズ釣は如何にも贅沢に行われたものです。

ところで釣の味はそれでいいのですが、やはり釣は根ねが魚を獲とるといふことにあるものですから、余り釣れないと遊びの世界も狭くなります。或日あるのこと、ちつとも釣れません。釣れないというのと未熟な客はとかくにぶつぶつ船頭に向つて愚痴ぐちをこぼすものですが、この人はそういうことを言うほどあさはかではない人でしたから、釣れなくてもいつもの通りの機嫌でその日は帰つた。その翌日も日取りだったから、翌日もその人はまた吉公きちこうを連れて出た。ところが魚というのは、それは魚だからいさえすれば餌えさがあれば食いそうなものだけれども、そうも行かないもので、時によると何かを嫌つて、例

えば水を嫌うとか風を嫌うとか、あるいは何か不明な原因があつてそれを嫌うというと、いても食わないことがあるものです。仕方がない。二日ともさつぱり釣れない。そこで幾ら何でもちつとも釣れないので、吉公は弱りました。小潮こしおの時なら知らんこと、いい潮に出ているのに、二日ともちつとも釣れないというのは、客はそれほど思われないにしたところで、船頭を取つては面白くない。それも御客が、釣も出来ていれば人間も出来ている人で、ブツリとも言わないでいてくれるのでかえつて気がすくみます。どうも仕様がなない。が、どうしても今日は土産みやげを持たせて帰そうと思ふものですから、さあいろいろな潮行しおゆきと場処ばしょとを考えて、あれもやり、これもやつたけれども、どうしても釣れない。それがまた釣れるべきはずの、月のない大潮おおしおの日。どうしても釣れないから、吉

もとうとうへたばつて終つて、

「やあ旦那、どうも二日とも投げられちゃつて申訳がござい
ませんなア」と言う。客は笑つて、

「なアにお前、申訳がございませんなんて、そんな野暮かた
ぎのことを言うはずの商売じゃねえじゃねえか。ハハハ。い
いやな。もう帰るより仕方がねえ、そろそろ行こうじゃない
か。」

「へい、もう一ヶ処いっしょやつて見て、そうして帰りましょう。」
「もう一ヶ処またつて、もうそろそろ真まづみになつて来るじゃ
ねえか。」

真まづみというのは、朝あさのを朝あさまづみ、晩ゆふのを夕ゆふまづみと申し
ます。段々と昼ひるになつたり夜よるになつたりする迫せりつめた時を
いうのであつて、とかくに魚は今までちつとも出て来なかつ

たのが、まづみになって急に出て来たりなんかするものです。吉の腹の中では、まづみに中あてたいのですが、客はわざとその反対をいったのでした。

「ケイズ釣に来て、こんなにおそ晩くなって、お前、もう一ヶ処なんて、そんなぶいきなことを言い出して。もうよそうよ。」
「済みませんが旦那、もう一ヶ処ちよいと当てて。」

と、客と船頭が言うことがあべこべになりました、吉は自分の思う方へ船をやりました。

吉は全敗ぜんぱいに終らせたくない意地から、舟を今日までかかったことのない場処へ持つて行って、「かし」を決めるのに慎重な態度を取りながら、やがて、

「旦那、竿は一本にして、みよしの真正面うまへ巧く振込んで下さい」と申しました。これはその壺つぼ以外は、左右も前面も、恐

ろしいカカリであることを語っているのです。客は合点して、「あいよ」とその言葉通りに実に巧く振込みましたが、心中では氣乗薄きのりうすであつたことも争えませんでした。すると今手にしていた竿を置くか置かぬかに、魚の中りあたか芥ごみの中りかわからぬ中り、——大魚たいぎよに大ゴミおおのような中りがあり、大ゴミに大魚のような中りがあるもので、そういう中りが見えますと同時に、二段引どころではない、糸はピンと張り、竿はズイと引かれて行きそうになりましたから、客は竿尻を取つてちよいと当てて、直すくに竿を立てにかかりました。が、こつちの働きは少しも向うへは通じませんで、向うの力ばかりが没義道もぎじょうに強うございしました。竿は二本継にほんつぎの、普通じょうものの上物でしたが、継手つぎての元際もとぎわがミチリと小さな音がして、そして糸は敢あえなく断きれてしまいました。魚が来てカカリへ啣くわえ込んだのか、大芥おおごみが

持つて行つたのか、もとより見ぬ物の正体は分りませんが、吉はまた一つ此処こゝで黒星がついて、しかも竿が駄目になつたのを見逃しはしませんで、一層心中は暗くなりました。かういうこともない例ではありませんが、飽あまでも練れた客で、

「後追あとおい小言こごと」などは何も言わずに吉の方を向いて、

「帰れつていうことだよ」と笑いましたのは、一切の事を「もう帰れ」という自然の命令の意味いみあい合だと軽く流して終しまつたのです。「へい」というよりほかはない、吉は素直にカシを抜いて、漕こぎ出しながら、

「あつしの檣ちよぼい蒲いち一がコケだつたんです」と自語しご的に言つて、チヨイと片手で自分の頭かしらを打つ真似まねをして笑つた。「ハハハ」「ハハハ」と軽い笑わらいで、双方とも役者が悪くないから味な幕切まくぎれを見せたのでした。

海には遊船ゆうせんはもとより、何の舟も見渡す限り見えないようになつていました。吉はぐいぐいと漕いで行く。余りおそ晩くまでやつていたから、まずい潮しほになつて来た。それを江戸の方に向つて漕いで行く。そうして段々やつて来ると、陸はもう暗くなつて江戸の方遙はるかにチラチラと燈ひが見えるようになりました。吉は老いても巧いもんで、頻しきりと身体からだに調子をのせて漕ぎます。苦とまは既に取除とりのけてあるし、舟はずんずんと出る。客はすることもないから、しゃんとして、ただぼかんと海面うみづらを見てみると、もう海の小波せうなみのちらつきも段々と見えなくなつて、雨あまずつた空が初はじめは少し赤味があつたが、ぼうつと薄墨うすずみになつてまいりました。そういう時は空と水が一緒にはならななければいけません、空の明るさが海へ溶込とけこむようになつて、反射みずぎわする気味が一つもないようになつて来るから、水際みずぎわが蒼茫そうぼうと薄

暗くて、ただ水際だということが分る位の話、それでも水の上は明るいものです。客はなんにも所在がないから江戸のあの燈は何処の燈だろうなどと、江戸が近くなるにつけて江戸の方を見、それからずいと東の方を見ますと、——今漕いでいるのは少しでも潮が上から押すのですから、漕を外れた、つまり水の抵抗の少い処を漕いでいるのですが、漕の方をヒョイツと見るといいうと、暗いというほどじゃないが、よほど濃い鼠色に暮れて来た、その水の中からふつと何か出ました。はてナと思つて、そのまま見ているとまた何かヒョイツと出て、今度は少し時間があつてまた引込んでしまいました。葎か蘆のような類のものに見えたが、そんなものなら平らに水を浮いて流れるはずだし、どうしても細い棒のようなものが、妙な調子でもつて、ツイと出てはまた引込みます。何の

必要があるではないが、合点が行きませぬから、

「吉や、どうもあすこの処に変なものが見えるな」とちよつと声をかけました。客がジツと見ているその眼の行方ゆくえを見ますと、丁度その時またヒョイツと細いものが出ました。そしてまた引込みました。客はもう幾度も見ましたので、

「どうも釣竿が海の中から出たように思えるが、何だろう。」

「そうでござんすね、どうも釣竿のように見えましたがね。」

「しかし釣竿が海の中から出る訳はねえじゃねえか。」

「だが旦那、ただの竹竿たけざおが潮の中をころがって行くのとは違つた調子があるので、釣竿のように思えるのですネ。」

吉は客の心に幾らでも何かの興味を与えたいと思つていた時ですから、舟を動かしてその変なものが出た方に向ける。

「ナニ、そんなものを、お前、見たからって仕様がねえじゃ

ねえか。」

「だって、あつしにも分らねえおかしなもんだからちよつと後学こうがくのために。」

「ハハハ、後学のためには宜よかつたナ、ハハハ。」

吉は客にかまわず、舟をそつちへ持つて行くと、丁度途端とたんにその細長いものが勢いきおいよく大きく出て、吉の真向まっこうを打たんばかりに現われた。吉はチャツと片手に受留うけとめたが、シブキがサツと顔へかかった。見るとたしかにそれは釣竿で、下に何かいてグイと持つて行こうとするようなので、なやすようにして手をはなさずに、それをすかして見ながら、

「旦那これは釣竿です、野布袋のぼていです、良いものようです。」

「フム、そうかい」といいながら、その竿の根の方を見て、

「や、お客さんじゃねえか。」

お客さんというのは溺死者できししやのことを申しますので、それは漁やなんかに出る者は時々はそういう訪問者に出会いますから申出もうしだした言葉です。今の場合、それと見定めましたから、何も嬉うれしくもないことゆえ、「お客さんじゃねえか」と、「放してしまえ」と言わぬばかりに申しましたのです。ところが吉は、

「エエ、ですが、良い竿ですぜ」と、足らぬ明るさの中でためつすかしつ見ていて、

「野布袋の丸まるできア」と付足つけたした。丸というのはつなぎ竿

になつていない物のこと。野布袋竹のぼていだけというのは申すまでもな

く釣竿用の良いもので、大概の釣竿は野布袋の具合のいいのを他の竹の竿につないで穂竹ほだけとして使います。丸というと、

一竿ひとさお全部まるごとがそれなのです。丸が良い訳はないのですが、丸で

いて調子の良い、使えるようなものは、稀物まれもので、つまり良いものという訳になるのです。

「そんなこと言つたつて欲しかあねえ」と取合いませんでした。

が、吉には先刻客さつきの竿をラリにさせたことも含んでいるからでしょうか、竿を取ろうと思ひまして、折らぬように加減をしながらグイと引きました。すると中浮ちゆうふうぎになつていた御客様は出て来ない訳には行きませんでした。中浮と申しますのは、水死者に三態あります、水面に浮ぶのが一ツ、水底に沈むのが一ツ、両者の間が即ち中浮です。引かれて死体は丁度客の坐の直ぐ前に出て来ました。

「詰つまらねえことをするなよ、お返し申せと言つたのに」と言いながら、傍そばに来たものですから、その竿を見ますという

と、如何にも具合の好きそうなものです。竿というものは、節ふしと節とが具合よく順々に、いい割合を以て伸びて行つたのがつまり良い竿の一条件です。今手元からずつと現われた竿を見ますと、一目ひとめにもわかる実に良いものでしたから、その武士も、思わず竿を握りました。吉は客が竿へ手をかけたのを見ますと、自分の方では持切れませんので、

「放しますよ」といって手を放して終しまつた。竿尻より上の一尺ばかりのところを持つと、竿は水の上に全身を凜とあらわして、あたかも名刀の鞘さやを払つたように美しい姿を見せた。

持たない中うちこそ何でもなかつたが、手にして見るとその竿に対して油然ゆうぜんとして愛念あいねんが起つた。とにかく竿を放そうとして二、三度こづいたが、水中の人が堅く握つていて離れない。もう一寸すん一寸に暗くなつて行く時、よくは分らないが、お客

さんというのはでっぷり肥ふとった、眉の細くて長いきれいなのが僅わずかに見える、耳朶みみたぶが甚はなはだ大きい、頭はよほど禿はげている、まあ六十近い男。着ている物は浅葱あさぎの無紋むもんの木綿縮もめんちぢみと思われる、それに細い麻あさの襟えりのついた汗取りあせとを下につけ、帯は何だかよく分らないけれども、ぐるりと身体からだが動いた時に白い足袋たびを穿はいていたのが目に浸しみて見えた。様子を見ると、例えば木刀にせよ一本差して、印籠いんろうの一つも腰こしにしている人の様子でした。

「どうしような」と思わず小声で言った時、夕風が一※筋3さつと流れて、客は身体からだの何処どこかが寒いような気がした。捨ててしまっても勿体もったいない、取ろうかとすれば水中の主ぬしが生命いのちがけで執念深く握にぎっているのです。躊躇ちゆうちゆうのさまを見て吉は

また声をかけました。

「それは旦那、お客さんが持つて行つたつて三途川さんずのかわで釣をする訳でもありますまいし、お取りなすつたらどんなものでしょう。」

そこでまたこづいて見たけれども、どうしてなかなかしつかり掴つかんでいて放しません。死んでも放さないくらいなのですから、とてもしつかり握つていて取れない。といつて刃物とりだを取出して取る訳にも行かない。小指でしつかり竿尻つかを掴んで、丁度それも布袋竹ほていだけの節の処を握つているからなかなか取れません。仕方がないから渋川流しぶかわりゆうという訳でもないが、わが拇指おやゆびをかけて、ぎくりとやつてしまった。指が離れる、途端せんしゆじんに先主人は潮下しおしもに流れて行つてしまい、竿はこちらに残りました。かりそめながら戦つたわが掌てを十分に洗つて、ふとこ

ろ紙三、四枚でそれを拭い、そのまま海へ捨てますと、白いかみだま、たましい紙玉は魂でももあるようにふわふわと夕闇の中を流れ去りまして、やがて見えなくなりました。吉は帰りをいそぎました。

「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、ナア、一体どういいうのだらう。なんにしても岡釣おかづりの人には違いねえな。」

「ええ、そうです。どうも見たこともねえ人だ。岡釣でも本所、深川ふかがわ、真鍋河岸まなべがしや万年まんねんのあたりでまごまごした人とも思われねえ、あれは上かみの方の向島むこうじまか、もつと上の方の岡釣師おかづりですな。」

「なるほど勘が好い、どうもお前うまいことを言う、そして。」

「なアに、あれは何でもございませんよ、中氣ちゆうきに決まっていますよ。岡釣をしていて、変な処にしゃがみ込んで釣つてい

て、でかい魚さかなを引かけた途端に中気が出る、転げ込んでしまえばそれまででしょうネ。だから中気の出そうな人には平場でない処の岡釣はいけねえと昔から言います。勿論もちろんどんなところだつて中気にいいことはありませんがネ、ハハハ。」

「そうかなア。」

それでその日は帰りました。

いつもの河岸に着いて、客は竿だけ持つて家に帰ろうとする。吉が

「旦那は明日あすは？」

「明日も出るはずになつてゐるんだが、休ませてもいいや。」

「イヤ馬鹿雨ばかあめでさえなければあつしやあ迎えに参りますから。」

「そうかい」と言つて別れた。

あくる朝起きてみると雨がしよしよと降っている。

「ああこの雨を孕んでやがったんで二、三日漁がまずかつたんだな。それとも赤潮でもさしていたのかナ。」

約束はしたが、こんなに雨が降っちゃ奴も出て来ないだろうと、その人は家うちにいて、しようことなしの書見しよけんなどしていると、昼近くなつた時分に吉はやつて来た。庭口からまわらせる。

「どうも旦那、お出でになるかならないかあやふやだつたけれども、あつしやあ舟を持つて来ておりました。この雨はもう直じきあがるに違ちがえねえのですから参りました。御伴おともをしたいともいい出せねえような、まずい後あとですが。」

「アアそうか、よく来てくれた。いや、二、三日お前にムダ骨を折らしたが、おしまいおしまいに竿が手に入るなんてまあ変なこ

とだなア。」

「竿が手に入るてえのは釣師には吉兆きつちようでさア。」

「ハハハ、だがまあ雨が降っている中うちあ出たくねえ、雨を止やませる間遊あいだんでいねえ。」

「へい。時に旦那、あれは？」

「あれかい。見なさい、外鴨居そとがもいの上に置いてある。」

吉は勝手の方へ行つて、雑巾盥ぞうきんだらいに水を持つて来る。すつかり竿をそれで洗つてから、見るといふと如何にも良い竿。じつと二人は検あらため気味きみに詳しく見ます。第一あんなに濡ぬれていた

ので、重おもくなつていゝるべきはずだが、それがちつとも水が浸ひみていないようにその時も思つたが、今も同じく軽い。だからこれは全く水が浸ひみないように工夫くふうがしてあるとしか思おもわれない。それから節廻ふしまわりの良いことは無類むるい。そうして蛇口へびぐちの処

を見るというと、素人細工に違いないが、まあ上手じょうずに出来る。それから一番太い手元の処を見るとちよいと細工がある。細工といったって何でも無いが、ちよつとした穴を明けて、その中に何か入れでもしたのかまた塞ふさいである。尻手しつてなわ縄が付いていた跡でもない。何か解らない。そのほかには何の異かわったこともない。

「随分めず稀らしい良い竿えいだな、そしてこんな具合の好いい軽い野布袋のぼていは見たことがない。」

「そうですね、野布袋という奴は元来重いんでございます、そいつを重くちやいやだから、それで工夫をして、竹がまだ野に生きてうちいる中に少し切目きりめなんか入れましたり、痛めたりしまして、十分に育たないように片かたつ方をそういうように痛める、右なら右、左なら左の片方をそうしたのを片かたうきす、両

方から攻める奴を諸うきすといひます。そうして拵えると竹が熟した時に養いが十分でないから軽い竹になるのです。」

「それはお前俺も知つてゐるが、うきすの竹はそれだから萎びたようになつて面白くない顔つきをしてゐるじゃないか。これはそうじゃない。どういふことをして出来たのだらう、自然にこういう竹があつたのかなア。」

竿というものの良いのを欲しいと思つたと、釣師は竹の生えてゐる藪に行つて自分で以てさがしたり撰んだりして、買約束をして、自分の心そのままに育てたりしますものです。そういう竹を誰でも探しに行く。少し釣が劫を経て来るとそういうことにもなります。唐の時に温庭※という詩人、これがどうも道楽者で高慢で、品行が悪くて仕様がなない人でしたが、釣

にかけては小児こども同様、自分で以て釣竿を得ようと思つて裴氏はいし
 という人の林に這入はいり込んで良い竹を探した詩があります。
 一径互いつけいたがいに紆直うちよくし、茅棘亦已ぼうきよくまたすでに繁しげし、という句があります
 から、曲がりくねつた細径ほそみちの茅かやや棘いばらを分けて、むぐり込むの
 です。歴尋れきじんす嬋娟せんえんの節、翦破せんぱす蒼莨根そうろうこん、とありますから、
 一々この竹、あの竹と調べまわつた訳です。唐の時は釣が非
 常に行われて、薛氏せつしの池という今日まで名の残る位の釣堀つりぼりさ
 えあつた位ですから、竿屋だとして沢山たくさんありましたらうに、当
 時持囃もてはやされた詩人の身で、自分で藪くぐりなんぞをしてまで
 も気に入つた竿を得たがつたのも、好すきの道なら身をやつす道
 理でございます。半井卜養なからいぼくようという狂歌師の狂歌に、浦島うらしまが釣
 の竿とて呉竹くれたけの節はろくろく伸びず縮まず、というのがあり
 ますが、呉竹の竿など余り感心出来ぬものですが、三十六

節あつたとかで大おおに節のことを褒ほめていきます、そんなようなものです。それで趣味が高じて来るといふと、良いのを探すのに浮身うきみをやつすのも自然いの勢いきおいです。

二人はだんだんと竿に見入つてゐる中うちに、あの老人が死んでも放さずにいた心持が次第に分つて来ました。

「どうもこんな竹は此こ処こゝらに見かけねえですから、よその国の物か知れませぬ。それにしろ二間けんの余よもあるものを持つて来るのも大変な話だし。浪人の楽らくな人だか何だか知らないけれども、勝手なことをやつて遊んでゐる中うちに中気が起つたのでしようが、何にしろ良い竿だ」と吉はいいました。

「時にお前、蛇口を見ていた時に、なんじゃないか、先についていた糸をくるくるつと捲まいて腹掛はらがけのどんぶりに入れちやつたじゃねえか。」

「エエ邪魔つけでしたから。それに、今朝それを見まして、それでわつちがこつちの人じゃねえだろうと思つたんです。」
「どうして。」

「どうしてつたつて、段々細だんだんほそにつないであります。段々細につなぐというのは、はじまりの処が太い、それから次第に細いのまたそれより細いのと段々細くして行く。この面倒な法は加州かしゅうやなんぞのような国に行くと、鮎あゆを釣るのに蚊鉤かばりなど使つて釣る、その時蚊鉤がうまく水の上に落ちなければまあずいんで、糸が先に落ちて後あとから蚊鉤が落ちてはいけない、それじゃ魚さかなが寄らない、そこで段々細の糸を拵さかえるんです。どうして拵さかえますかというはと、鋏はさみを持って行つて良い白馬の尾の具合のいい、古馬にならないやつのを頂戴して来る。そうしてそれを豆腐とうふの粕かすで以て上からぎゅうぎゅうと次第々々

にこく。そうすると透き通るようにきれいになる。それを十
六本、右撚りなら右撚りに、最初は出来ないけれども少し慣
れると訳なく出来ますことで、片撚りに撚る。そうして一つ
拵える。その次に今度は本数を減らして、前に右撚りなら今
度は左撚りに片撚りに撚ります。順々に本数をへらして、右
左をちがえて、一番終いには一本になるようにつなぎます。
あつしあ加州の御客に聞いておぼえましたがネ、西の人は考
がこまかい。それが定跡じょうせきです。この竿は鮎じゆんべをねらうのではな
い、テグスでやつてあるけれども、うまくこきがついて順減
らしに細くなつて行くようにしてあります。この人も相当に
釣に苦勞してありますね、切れる処を決めて置きたいからそう
いうことをするので、岡釣じゃなおのことです、何処どこでも構
わないでぶつ込むのですから、ぶち込んだ処にかかりがあれ

ば引ひかかってしまう。そこで竿をいたわつて、しかも早く埒らちの明あくようにするには、竿の折れそうになる前に切れ処どこから糸のきれるようにして置くのです。一番先の細い処から切れる訳だからそれを竿の力で割わりだしていけば、竿に取つては怖いことも何もない。どんな処へでもぶち込んで、引ひかかっていけなくなつたら竿は折れずに糸が切れてしまう。あとはまた直ちぐ鉤はりをくつつければそれでいいのです。この人が竿を大事にしたことは、上手に段々細にしたところを見てもハッキリ読めましたよ。どうも小指であんなに力を入れて放さないで、まあ竿と心しん中じゆうしたようなもんだが、それだけ大事にしていたのだから、無理もねえでさあ。」

などと云っている中うちに雨がきれかかりになりました。主人は座敷、吉は台所へ下さが下つて昼の食事を済ませ、遅いけれども「お

で
出なさい」「出よう」というので以て、二人は出ました。無論その竿を持つて、そして場処に行くまでに主人は新しく上手に自分でシカケを段々細に拵えました。

さあ出て釣り始めると、時々雨が来ましたが、前の時と違つて釣れるわ、釣れるわ、むやみに調子の好い釣になりました。とうとうあまり釣れるために晩おそくなつて終いまして、昨日と同じような暮方くれがたになりました。それで、もう釣もお終いにしようなあとというので、蛇口から糸を外はずして、そうしてそれを蔵しまつて、竿は苦裏とまうらに上げました。だんだんと帰つて来るといふと、また江戸の方に燈ひがチヨイチヨイ見えるようになりました。客は昨日からの事を思つて、この竿を指を折つて取つたから「指折ゆびお※」⁵と名づけようかなどと考えていました。吉

はぐいぐい漕いで来ましたが、せつせと漕いだので、艫臍ろべそが乾いて来ました。乾くと漕ぎづらいから、自分の前の処へそにある柄杓ひしやくを取って潮しほを汲んで、身を妙にねじつて、ばつさりと艫の臍へその処に掛けました。こいつが江戸前の船頭は必ずそういうようにするので、田舎船頭のせぬことです。身をねじつて高い処から其処そこを狙つてシャツと水を掛ける、丁度その時には臍が上を向いています。うまくやるもので、浮世うきよえ絵好みえの意気な姿です。それで吉が今身体からだを妙にひねつてシャツとかける、身のむきを元に返して、ヒョツと見るといふと、丁度昨日きのうと同じ位の暗さになっている時、東の方に昨日と同じようによし葎よしのようなものがヒョイヒョイと見える。オヤ、と云つて船頭がそつちの方をジツと見る、表まの間に坐つていたお客も、船頭がオヤと言つてあつちの方を見るので、その方を見

ると、薄暗くなっている水の中からヒヨイヒヨイと、昨日と同じように竹が出たり引込んだりひっこします。ハテ、これはと思つて、合点しかねていふと、船頭も驚きながら、旦那が気が附いたかと思つて見ると、旦那も船頭を見る。お互たがいに何だか訳の分らない気持がしているところへ、今日は少し生なま暖かい海の夕風が東から吹いて来ました。が、吉は忽たちまち強がつて、

「なんでえ、この前の通りのものがそこに出て来る訳はありあしねえ、竿はこつちにあるんだから。ネエ旦那、竿はこつちにあるんじゃないやありませんか。」

怪かいを見て怪とせざる勇氣で、変なものが見えても「こつちに竿があるんだからね、何でもない」という意味を言つたのであつたが、船頭もちよつと身を屈かがめて、竿の方を覗のぞく。客

も頭の上の闇を覗く。と、もう暗くなつて苦裏とまうらの処だから竿があるかないか殆ど分らない。かえつて客は船頭のおかしな顔を見る、船頭は客のおかしな顔を見る。客も船頭もこの世でない世界を相手の眼の中から見出したいような眼つきに相互に見えた。

竿はもとよりそこにあつたが、客は竿を取出して、南無阿弥陀仏なむあみだぶつ、

一 (昭和十三年九月)

後註

一 29字下げ、地より1字あきで

底本：「幻談・観画談 他三篇」岩波文庫、岩波書店

1990（平成 2）年 11 月 16 日第 1 刷発行

底本の親本：「露伴全集」第六巻、岩波書店

1953（昭和 28）年 12 月刊

※繰り返し記号の二の字点（漢数字の「二」を一筆書きにしたようなもの）は、「々」で代えた。

入力：Sin

校正：伊藤時也

2000 年 5 月 31 日公開

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。